

富田林市文化財調査報告20

富田林寺内町遺跡

— 倉庫等建設に伴う発掘調査概要報告 (GC90) —

2022. 9

富田林市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成2（1990）年度に、商店倉庫等の建設に伴い実施した富田林寺内町遺跡の発掘調査の成果をまとめた報告書である。調査区の略号は「GC90」である。
2. 現地調査は、富田林市教育委員会社会教育課（当時）の中辻 宜、松本 徹、田川 友美が担当し、平成2年4月16日に着手し、平成2年5月7日に終了した。
3. 調査には、南 元康、楠木 理恵、伊藤 三和、井原 稔、植木 佐知子、植木 敦子、植田 友佳子、上田 行勝、頃安 敏夫、中岡 勝、廣野 知子、松下 友晶、山本 恵子、奥野 久雄、小田 信代、中川 正博、西澤 寿子、沼間 恵子、原田 亮子、前野 美智子、山本 節子、吉田 光夫、渡辺 サダ子の協力を得た。
4. 現地調査から長い年月が経過したが、令和3（2021）年度に入って報告書の編集に着手した。編集作業は、青木 昭和（富田林市教育委員会文化財課）が行い、本書刊行をもって調査が完了した。
5. 本書の執筆は、各々文末に記すものがあつた。なお、編集にあたって、執筆者の文章を尊重したが、若干の文言修正を行っている。
6. 出土遺物及び調査時の記録類は、富田林市教育委員会文化財課で保管している。広く活用されることを望む。
7. 調査には、故 北野 耕平氏（富田林市文化財調査会委員・神戸商船大学教授（当時））、故 鈴木 秀典氏（財団法人大阪市文化財協会（当時））から格別の助言や援助を受けた。また、発掘調査にあたって土地所有者をはじめ、関係各位のご理解、ご協力を得た。また、栗田 薫氏から格別の援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。

凡 例

1. 本書に用いる遺構名称は、調査時の用例にならって、SD（溝）、SK（土坑）、SW（井戸）、SX（落ち込み）、SP（ピット）としている。この遺構番号は、トレンドごとに付している。
2. 遺構名称に併記した略号のうち「LN」は発掘調査時に使用したもので、LN1～LN6は各層の堆積順序（Layer Number）を示し、LN11以降は、それぞれ個別の遺構の位置（Locus Number）を示している。
出土遺物にはこの略号を用いて注記し出土位置を記録している。
3. 挿図の方針は磁北を示し、縮尺は図中に記載した。標高は東京湾平均海面（T.P.）を示している。
4. 文中の住所表記は届出があった当時のものであり、現在と異なる場合がある。

目 次

例言・凡例

第1章 平成2年度調査の概要	1
第2章 調査に至る経過	3
第3章 調査成果	3
第1節 調査の方法	3
第2節 基本層序	4
第3節 遺構と遺物	4
第4節 小結	21

表 目 次

表1 発掘調査一覧表	1
------------	---

挿図目次

第1図 平成2年度調査遺跡分布図	2
第2図 調査地位置図	3
第3図 トレンチ配置図	4
第4図 基本層序模式図	4
第5図 第1トレンチ平面図	4
第6図 第1トレンチ出土遺物	5
第7図 第2トレンチ平面図	6
第8図 第2トレンチ出土遺物	8
第9図 第3トレンチ平面図	10
第10図 第3トレンチ出土遺物	12
第11図 第4トレンチ平面図	15
第12図 第4トレンチ出土遺物（その1）	16
第13図 第4トレンチ出土遺物（その2）	17

図版目次

図版1 (上) 第1トレンチ全景	(下) 第2トレンチ全景
図版2 (上) 第2トレンチ井戸1近景	(下) 第2トレンチ土坑1甕出土状況
図版3 (上左・上右) 第3トレンチ全景	(下) 第3トレンチ土坑5近景
図版4 (上) 第3トレンチ土坑7遺物出土状況 (下左) 第4トレンチ第3層上面遺構全景	(下右) 地山面遺構全景
図版5 出土遺物	

第1章 平成2年度調査の概要

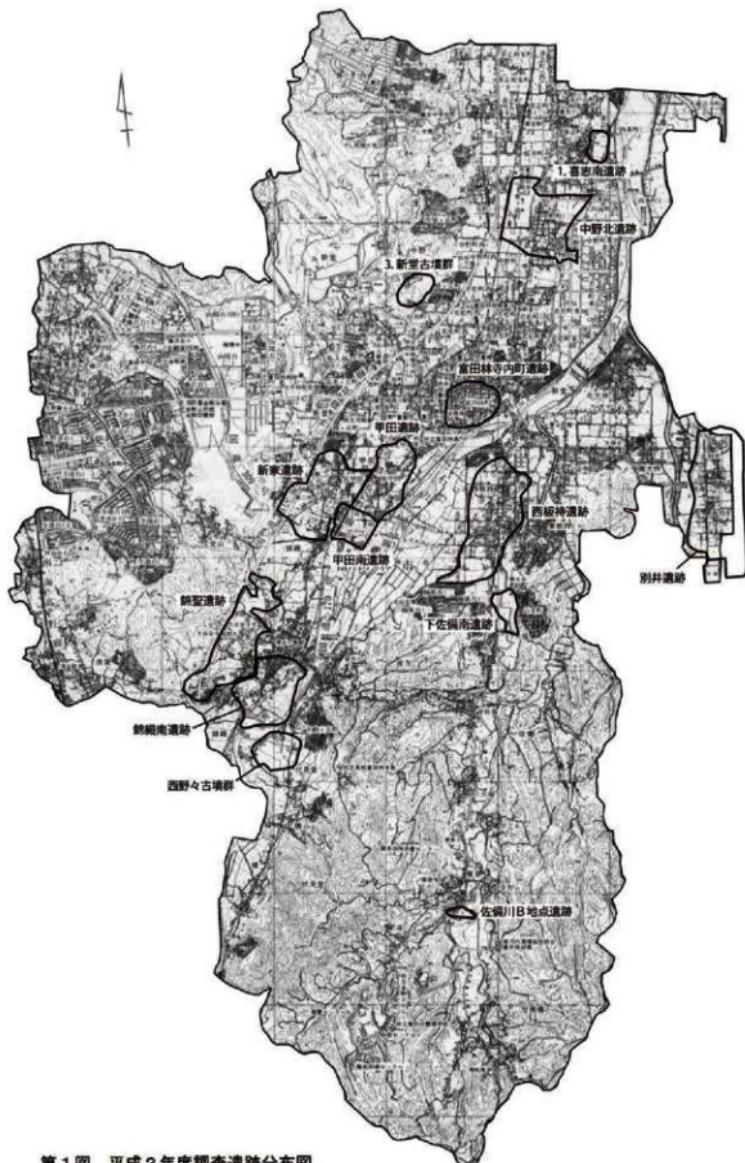
平成2年度は、市内14遺跡で20件の発掘調査を実施した。それぞれの発掘調査の所見は表1に、また埋蔵文化財包蔵地の範囲として認識されている遺跡の位置は第1図に示した。

本書では、富田林寺内町遺跡（2）の調査について、その概要を記述する。

(中辻)

表1 発掘調査一覧表

No	調査期間	遺跡名	所在地	調査面積 (m ²) (対象面積)	調査原因	調査内容
1	H 2. 4. 13	別井遺跡	大字別井	0.9 (37)	個人住宅	0.6×1.6 mのトレンチを機械掘削。 遺構・遺物なし。
2	H 2. 4. 16 ～ 5. 7	富田林寺内町遺跡	富田林町	57 (220)	倉庫等	本書掲載
3	H 2. 4. 17	中野北遺跡	中野町二丁目	(198)	個人住宅	地山面で遺構を検出。
4	H 2. 5. 1	中野北遺跡	中野町一丁目	(125)	個人住宅	トレント調査。 地山面で遺構検出。盛土の上、施工。
5	H 2. 8. 28	佐備川B地点遺跡	大字龍泉	(746)	個人住宅	遺構なし。
6	H 2. 9. 5	別井遺跡	大字別井	2 (427)	個人住宅	1×2 mのトレントを人力掘削。遺構なし。 地山直上層で、土師器・瓦質土器細片出土。
7	H 2. 9. 10	別井遺跡	大字別井	2.25 (165)	個人住宅	1.5×1.5 mを人力掘削。遺構なし。床 土下の灰褐色土層から須恵器・土師器片、 サヌカイト割片出土。
8	H 2. 9. 26 ～ 9. 27	西野々古墳群	大字伏見堂	2 (475)	個人住宅	1×2 mのトレントを人力掘削。遺構なし。 土師器片・瓦器片ごく少量出土。
9	H 2. 11. 5	西板持遺跡	大字西板持	1.5 (289)	個人住宅	1×1.5 mのトレントを機械掘削。 水田面4面を確認。遺構なし。
10	H 2. 11. 28	甲田南遺跡	大字甲田	1.5 (43)	個人住宅	1×1.5 mを機械掘削。遺構・遺物なし。
11	H 2. 12. 5	下佐備南遺跡	大字佐備	1.32 (632)	農業倉庫	1.2×1.1 mのトレントを人力掘削。遺 構なし。土師器・須恵器・瓦器・弥生土 器(焼)片出土。
12	H 2. 12. 7 ～ 12. 8	新家遺跡	大字新家	1 (272)	農業倉庫	1×1 mのトレントを人力掘削。地山面 で埋土が灰褐色粘質土の溝状遺構を検出。 須恵器片出土。工事による影響なし。
13	H 2. 12. 11 ～ 12. 12	錦型遺跡	大字錦織	2 (301)	個人住宅	1×2 mの浄化槽部分を人力掘削。東西 方向の溝状遺構を検出。包含層より土師 器・須恵器片が出土。
14	H 2. 12. 17	喜志南遺跡	喜志町一丁目	1 (406)	個人住宅	1×1 mのトレント調査。地山面で遺構 検出。
15	H 2. 12. 21	西板持遺跡	大字西板持	2 (129)	個人住宅	1×2 mのトレント調査。遺構なし。 包含層から土師器・須恵器・瓦器片が出土。
16	H 3. 1. 7	新家遺跡	大字甲田	4 (309)	個人住宅	1×4 mのトレントを人力掘削。遺構な し。床土下の灰黄色土層で土師器高杯脚 部片が出土。
17	H 3. 1. 8	新堂古墳群	昭和町二丁目	2 (1,099)	個人住宅	1×2 mを人力掘削。遺構・遺物なし。
18	H 3. 1. 16 ～ 1. 18	甲田遺跡	甲田三丁目	2 (558)	個人住宅	1×2 mを人力掘削。遺構面を二面確認 したが工事による影響なし。製埴土器出 土。
19	H 3. 2. 22	錦織南遺跡	大字錦織	2 (499)	個人住宅	1×2 mを機械と人により掘削。遺構 なし。土師器・須恵器・瓦器片、サヌカ イト割片出土。
20	H 3. 2. 26	西板持遺跡	大字西板持	2 (334)	個人住宅	1×2 mを人力掘削。遺構・遺物なし。



第1図 平成2年度調査遺跡分布図

第2章 調査に至る経過

調査地は重要伝統的建造物群に選定されている富田林市寺内町内の北東端近くに位置し（第2図），古くから「たばきや（煙草屋）」と称する屋号の商店や倉庫が建っていた。この場所に，鉄骨2階建ての倉庫等が建設されることになり，協議の結果，建物基礎部分について発掘調査を実施することになった。調査面積は57m²である。

現地調査は，平成2年4月16日から5月7日まで実施し，その後，出土遺物の整理作業を行った。

(中辻)

第3章 調査成果

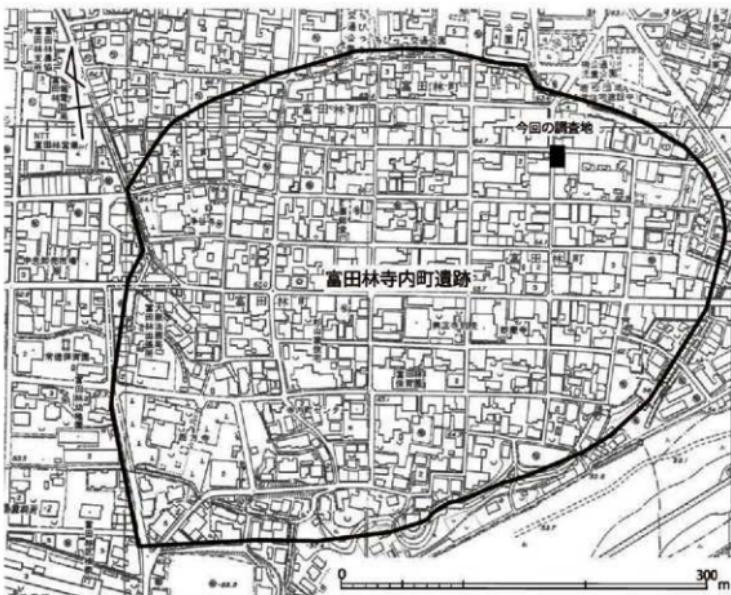
第1節 調査の方法〔第3図〕

調査区に，トレンチを4か所設定した（第3図）。

第1～第3トレンチは，後世の搅乱が著しかったため，表土を機械掘削した後，人力掘削により順次層位を地山面まで下げ，遺構を検出した。

第4トレンチは，現況地表面から約30cm下で遺構を確認したことから，一旦この面での遺構検出を行い，その後，さらに地山面まで人力掘削して下層遺構の検出を行った。

(中辻)



第2図 調査地位置図

第2節 基本層序 [第4図]

すべてのトレンチにおける現況地表面から地山面までの深さは約40cmを測る。

第1～第3トレンチでは、堆積層は2層で、第1層は約10cmの厚さの暗灰色土、第2層は約30cmの厚さの濁灰色土に濁黄色弱粘質土がブロック状に混入するが、部分的に黄褐色土が認められる土質である。

他方、第4トレンチは第1～第3トレンチに認められた第2層と同じ堆積層の下にもう1層あり、合計3層の堆積層が認められる。すなわち、第4トレンチの第1層は約10cmの厚さ、第2層は約20cmの厚さ、第3層は約10cmの厚さの濁灰色土層が認められた（第4図）。なお、第4トレンチでは、第3層の上面で上層遺構を、地山面で下層遺構を検出している。

（中辻）

第3節 遺構と遺物

[第5図～第15図、図版1～図版5]

以下、トレンチごとに記述する。

第1トレンチ（第5図・第6図、図版1上、図版5）

堆積層は2層で、遺構は地山面で検出した。

第1層から遺物は出土しなかったが、第2層からは、比較的多くの遺物が出土している。すなわち、須恵器3点、土師質土器15点、陶器7点、磁器11点、瓦5点である。

須恵器は細片のため器種は不明である。

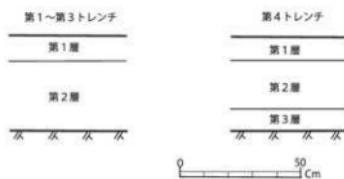
土師質土器のうち器種の分かるものに、ほう焰（第6図-1）が1点ある。口径29.8cm、残存高6.2cmを測り、口縁部から体部内面にかけて横ナデ調整、体部外面はヘラ削り調整が施されている。なお、体部外面には焦げがべつとりと付着している。

陶器は堺焼のすり鉢が1点、唐津焼の碗が5点、天目茶碗の高台部片が1点ある。碗（第6図-2、図版5-2）は口径8.6cm、高台高1.6cm、器高8.5cmを測る。京焼風陶器で、外面は樓閣山水が鉄で描かれている高台無軸の碗である。

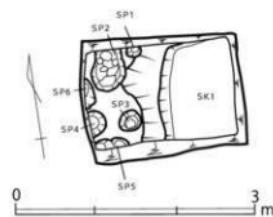
磁器には肥前磁器の碗が3点のほか、口縁部に釉薬のかけられていない小型の壺が1点、底部片のうち5点は見込み部に蛇の目釉剥ぎが施されている。



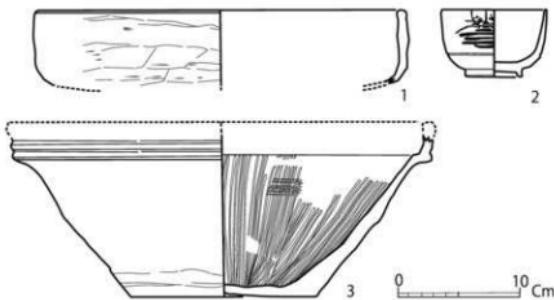
第3図 トレンチ配置図



第4図 基本層序模式図



第5図 第1トレンチ平面図



第6図 第1トレンチ出土遺物

瓦は丸瓦が3点、平瓦が2点ある。

第1トレンチで検出した構造は、土坑が1基、すなわち土坑1（SK1:LN11）、ピットが6基、すなわち、ピット1（SP1:LN12）、ピット2（SP2:LN13）、ピット3（SP3:LN14）、ピット4（SP4:LN15）、ピット5（SP5:LN16）、ピット6（SP6:LN17）である。

土坑1（SK1:LN11）

北側、南側、および東側は調査区外に続くが、東西（1.4）m、南北（1.2）mを検出した（カッコは検出した法量を示す。以下同じ。）。深さは0.92mを測る。埋土は3層に分かれ、第1層目は濁灰色弱粘質土に濁黄色土が混じり、第2層目は暗灰色弱粘質土に濁黄色粘質土がブロック状に混入し、第3層目は暗灰色粘質土である。

遺物は、磁器が1点、丸瓦が2点、平瓦が1点出土している。磁器は染付された碗である。丸瓦は玉縁式丸瓦である。

ピット1（SP1:LN12）

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $0.2 \times (0.2)$ mの規模で検出した。深さは0.08mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は土師質土器が2点と平瓦が2点出土している。

土師質土器は乳白色の小皿と平行タタキの施された甕体部片である。

ピット2（SP2:LN13）

調査区外に続き、平面形体は不整形で、 $0.45 \times (0.54)$ mの規模で検出した。埋土は濁灰色土である。

遺物は土師質土器が2点出土している。ともに細片のため、器種は分からぬが、そのうちの1点には煤が付着している。

ピット3（SP3:LN14）

平面形体は円形で、直径0.25mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は、陶器のすり鉢（第6図-3）が1点出土している。底径15.2cm、残存器高13.5cmを測る。口縁部端は欠失している。口縁部は受け口状に拡張し、外面に弦線が巡る。体部内面には4本/cmのすり目が施されている。

ピット4（SP4:LN15）

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $(0.21) \times 0.35$ mの規模で検出した。深さは0.09mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

ピット5 (SP5 : LN16)

調査区外に続き、平面形体は不整形で、(0.41) × (0.1) mの規模で検出した。深さは0.13mを測る。

遺物は出土していない。

ピット6 (SP6 : LN17)

調査区外に続き、平面形体は不整形で、(0.15) × 0.38mの規模で検出した。深さは0.09mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

第2トレンチ (第7図～第9図、図版1下・図版5)

堆積層は2層で、遺構は地山面で検出した。

第1層からは、陶器と磁器が出土している。陶器にはすり鉢3点と壺1点と器種不明の細片が5点、磁器には肥前磁器の碗6点、高台部片2点のほかに器種不明の細片が7点出土している。

第2層からは土師質土器、陶器、磁器、瓦が出土している。

第2トレンチで検出した遺構は、溝が3条、すなわち溝1 (SD1 : LN15)、溝2 (SD2 : LN19)、溝3 (SD3 : LN30) が、土坑が2基、すなわち土坑1 (SK1 : LN11, LN11-1)、土坑2 (SK2 : LN17)、井戸が1基、すなわち井戸1 (SW1 : LN16)、ピットが13基、すなわちピット1 (SP1 : LN12)、ピット2 (SP2 : LN13)、ピット3 (SP3 : LN14)、ピット4 (SP4 : LN20)、ピット5 (SP5 : LN28)、ピット6 (SP6 : LN31)、ピット7 (SP7 : LN27)、ピット8 (SP8 : LN26)、ピット9 (SP9 : LN25)、ピット10 (SP10 : LN22)、ピット11 (SP11 : LN24)、ピット12 (SP12 : LN23)、ピット13 (SP13 : LN21) である。

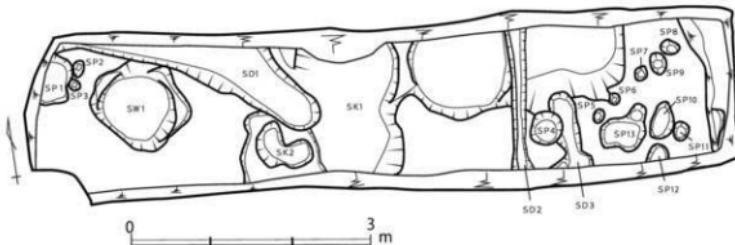
溝1 (SD1 : LN15)

調査区外に続くが、北西方向から南東方向に向かう溝である。長さは(3.4) mを検出した。幅は0.8m、深さは0.17mを測る。埋土は濁灰色土である。遺物は、陶器と磁器が出土している。

溝2 (SD2 : LN19)

調査区外に続くが、長さ(1.75) mを検出した。幅は0.25m、深さは0.07mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。



第7図 第2トレンチ平面図

溝3 (SD 3 : LN30)

調査区外に続くが、長さ（0.92）mを検出した。幅は0.55m、深さは0.16mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は土師質土器、瓦質土器、磁器が出土している。いずれも細片である。

土坑1 (SK 1 : LN11, LN11-1)

調査区外に続くが、東西4.55m、南北（1.35）mを検出した。深さは0.37mで、埋土は濁灰色弱粘質土に濁黄色粘質土が混じる。

遺物は、須恵器、土師質土器、軟質施釉陶器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦が出土している。

須恵器は細片が1点出土している。

土師質土器には、ほう焰、土釜などがある。

軟質施釉陶器は4点出土しているが、灯明皿（第8図-4・図版5-4）と灯明受皿（第8図-5・図版5-5）がある。灯明皿は口径5.4cm、器高1.0cmを測り、内面から口縁部外面にうすく釉薬がかけられている。底部は糸切りである。灯明受皿は口径6.3cm、器高1.2cmを測り、前者と同じく内面から体部外面にかけて釉薬がかけられている。底部は糸切りである。底部内面には直径3.8cm、幅0.2cm、高さ0.3cmの断面三角形状の受けが巡る。

瓦質土器には火鉢がある。

陶器は信楽焼の茶甕（第8図-10・11・図版2下）が2点出土している。

茶甕（10）は、口径25.7cm、最大腹径48.5cm、底径18.5cm、器高82.4cmを測る。体部外面、外底面に墨書があるが、文字が薄くなってかすれている。底部外面の文字は「山」のようにも見え、体部外面は向かって左側には長文が書かれているがよく分からぬ。もう一点の茶甕（11）は、口径30.6cm、最大腹径54.2cm、底径17.4cm、器高85.6cmを測る。内面には焼成前に付いたと推測できる砂粒の付着が認められる。体部外面には「丸に別き」の墨書が認められる。

磁器は肥前磁器の皿、碗などが出土している。

碗（第8図-6・図版5-6）は、口径10.8cm、高台径4.5cm、高台高0.6cm、器高4.8cmを測る。見込みの部分は蛇の目釉剥ぎで、疊付の部分に釉薬はかかっていない。体部外面は呉須で梅枝文が描かれている。もう一点の碗（第8図-7・図版5-7）は口径11.9cm、高台径4.8cm、高台高1.0cm、器高6.5cmを測る。疊付の部分に釉薬はかかっていない。体部外面に团扇文、口縁部と底部内面には圈線が、見込みには呉須で文様が描かれている。

瓦は軒丸瓦（第8図-8）、平瓦、棟瓦（第8図-9）などが出土している。軒丸瓦（8）は、瓦当面に右巻きの三巴文と、外区に珠文が8個付されている。焼成は良好ではあるが銀化していない。棟瓦（9）は長さ30cm、幅27cmを測る。焼成は良好であるが銀化していない。

土坑2 (SK 2 : LN17)

調査区外に続き、東西（1.0）m、南北（0.85）mを検出した。深さは0.05mで、埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は、陶器の細片が1点出土している。

井戸1 (SW 1 : LN16)

平面形体は不整形で、東西1.2m、南北1.6mの規模で検出した（図版2上）。深さは不明。埋土は灰黄色砂土である。

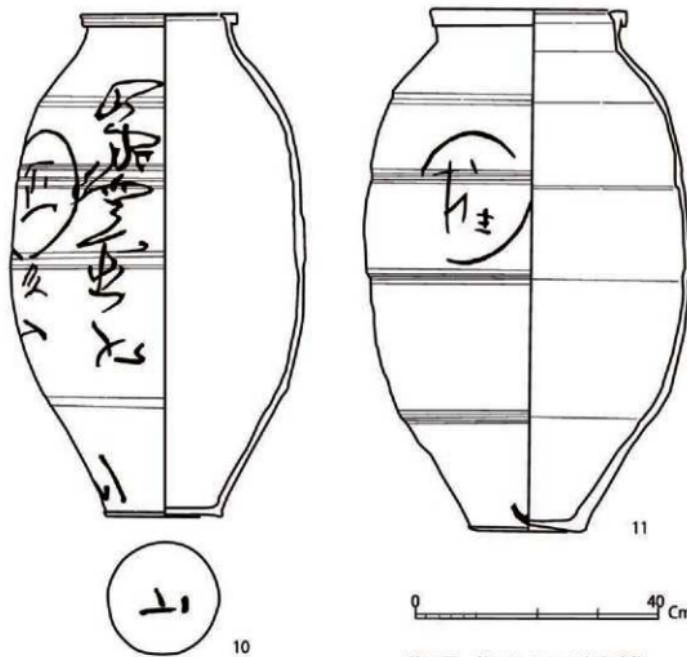
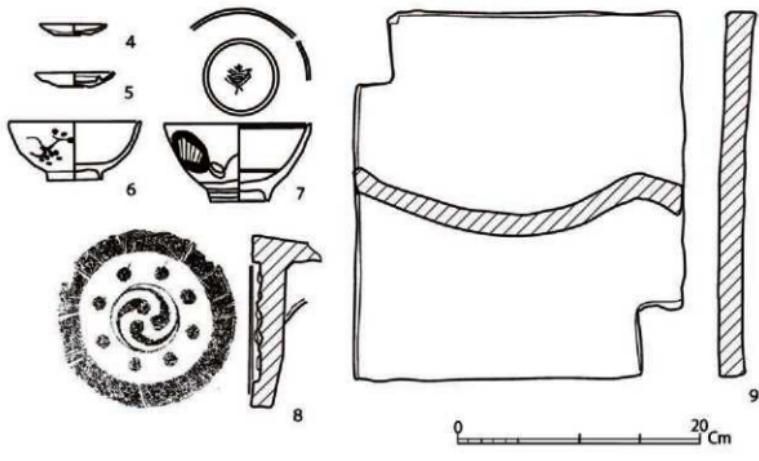
遺物は、須恵器、土師質土器、瓦が出土している。

須恵器は甕体部片が2点ある。土師質土器は口縁部が断面長方形の大甕の破片と、練鉢がある。

瓦には丸瓦と平瓦がある。

ピット1 (SP 1 : LN12)

調査区外に続き、平面形体はほぼ四角形で、（0.3）×0.6mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。



第8図 第2トレンチ出土遺物

遺物は陶器の細片が1点出土している。

ピット2 (SP2 : LN13)

平面形体は梢円形で、 0.15×0.2 mの規模で検出した。深さは0.06mを測る。埋土は灰褐色砂質色土である。

遺物は出土していない。

ピット3 (SP3 : LN14)

平面形体は円形で、直径0.15mを測る。深さは0.08mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物は土師質土器の細片が1点出土している。

ピット4 (SP4 : LN20)

平面形体は、ほぼ円形で直径0.4mの規模で検出した。深さは0.04mを測る。埋土は濁灰黄色土に黄色土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット5 (SP5 : LN28)

平面形体はほぼ円形で、直径0.16mの規模で検出した。深さは0.42mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

ピット6 (SP6 : LN31)

平面形体は円形で、直径0.13mの規模で検出した。深さは0.23mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

ピット7 (SP7 : LN27)

平面形体は隅丸方形で、 0.13×0.16 mの規模で検出した。深さは0.11mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

ピット8 (SP8 : LN26)

平面形体は梢円形で、 0.25×0.2 mの規模で検出した。深さは0.24mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

ピット9 (SP9 : LN25)

平面形体は梢円形で、 0.2×0.25 mの規模で検出した。深さは0.25mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

ピット10 (SP10 : LN22)

平面形体は不整形で、 0.26×0.45 mの規模で検出した。深さは0.03mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

ピット11 (SP11 : LN24)

平面形体は隅丸三角形で、 0.21×0.25 mの規模で検出した。深さは0.23mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

ピット12 (SP12 : LN23)

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $0.3 \times (0.2)$ mの規模で検出した。深さは0.08mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

ピット13 (SP13 : LN21)

平面形体は不整形で、 0.55×0.6 mの規模で検出した。深さは0.14mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

第3トレンチ（第9図・第10図、図版3・図版4上）

堆積層は2層で、遺構は地山面で検出した。

第1層からは、須恵器、土師質土器、軟質施釉陶器、陶器、磁器、瓦、砥石などが出土している。

須恵器は細片が1点ある。

土師質土器は小皿が1点出土している。

軟質施釉陶器には灯明受皿（第10図-14）が1点ある。口径11.1cm、器高2.05cmを測る。内面から口縁部にかけて釉薬がかかっている。口縁端部に煤が付着している。底部は糸切りである。陶器には甕、鉢、碗などがある。

磁器には鉢と皿（第10図-17）がある。皿（17）は口径14.0cm、高台径9.1cm、高台高0.6cm、器高4.3cmを測る。高台は蛇の目型高台。高台内は無釉である。体部外面には唐草文、見込みの部分には呉須で山水が描かれている。

第2層からは土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器、瓦などが出土している。土師器も須恵器も細片である。

土師質土器には甕、ほう焰などが出土している。

陶器には碗、すり鉢、甕などが出土している。

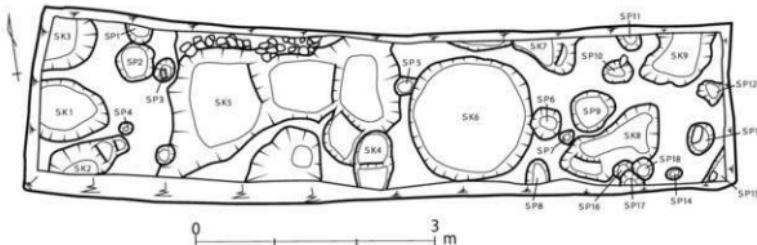
磁器は肥前磁器の碗（第10図-13・図版5-13）がある。口径10.7cm、高台径4.4cm、高台高0.8cm、器高5.1cmを測る。見込みは蛇の目釉剥ぎである。疊付きの部分には釉薬がかかっていない。体部外面は呉須で梅枝文が、高台には園線が描かれている。

瓦には平瓦と丸瓦がある。

第3トレンチで検出した遺構は、土坑が9基、すなわち土坑1（SK1:LN13）、土坑2（SK2:LN14）、土坑3（SK3:LN15）、土坑4（SK4:LN21）、土坑5（SK5:LN11）、土坑6（SK6:LN12）、土坑7（SK7:LN23）、土坑8（SK8:LN27）、土坑9（SK9:LN37）、ピットが18基、すなわちピット1（SP1:LN17）、ピット2（SP2:LN18）、ピット3（SP3:LN19）、ピット4（SP4:LN20）、ピット5（SP5:LN22）、ピット6（SP6:LN24）、ピット7（SP7:LN23）、ピット8（SP8:LN26）、ピット9（SP9:LN33）、ピット10（SP10:LN35）、ピット11（SP11:LN36）、ピット12（SP12:LN34）、ピット13（SP13:LN31）、ピット14（SP14:LN38）、ピット15（SP15:LN32）、ピット16（SP16:LN28）、ピット17（SP17:LN29）、ピット18（SP18:LN30）である。

土坑1（SK1:LN13）

調査区外に続き、東西(0.9)m、南北0.8m分を検出した。深さは0.2mで、埋土は濁灰色砂質土である。



第9図 第3トレンチ平面図

遺物は、土師質土器の甕が1点出土している。

口縁部は断面四角形で、体部外面には粗い平行叩き、内面は刷毛目で調整されている。

土坑2 (SK 2 :LN14)

調査区外に続き、東西1.0m、南北(0.43)mを検出した。深さは0.21mで、埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

土坑3 (SK 3 :LN15)

調査区外に続き、東西(0.6)m、南北(0.65)m分を検出した。深さは0.27mで、埋土は濁灰色砂質土である。

遺物は、土師質土器が1点、陶器が1点、平瓦が1点出土している。土師質土器と陶器は細片である。

土坑4 (SK 4 :LN21)

調査区外に続き、東西0.47m、南北(0.7)m分を検出した。深さは0.23mで、埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は土師質土器が1点、陶器が2点出土している。ともに細片である。

土坑5 (SK 5 :LN11)

調査区外に続き、東西2.9m、南北(1.8)mを検出した(図版3下)。深さは0.68mで、埋土は灰黄色砂質土である。

遺物は、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦が出土している。

須恵器は細片が1点ある。

土師質土器には、ほう焰(第10図-18・図版5-18)、香炉(第10図-21)、甕がある。

ほう焰は口径28.4cm、残存器高8.2cmを測る。口縁部は内外面とも横ナデ調整、底部内面はナデ調整が施されている。体部と底部の境目にはヘラ削り調整が施されている。外面は煤が付着している。香炉は口径14.4cm、器高7.3cmを測る。口縁部から体部にかけて横ナデ調整が施されている。底面は内外面とも煤が付着して調整は不明である。高台はヘラで面取りを施している。

瓦質土器は細片で2点ある。

陶器には、すり鉢(第10図-19・20)、甕(第12図-22)、碗などがある。

すり鉢は2点とも丹波焼で、すり鉢(19)は口径34.6cm、残存器高8.5cmを測る。口縁部は内外面とも回転ナデ調整が施されている。内面のすり目は4本/cmである。すり鉢(20)は口径34.0cm、残存器高6.8cmを測る。口縁部は内外面とも回転ナデ調整が施されている。すり目は3本/cmである。甕は口径15.2cm、器高22.6cm、底径18.2cmを測る。外面には釉薬がかけられている。口縁部上面は釉薬がかけられていない。また、内面には一部釉薬がかかっている部分がみられる。

磁器には碗(第11図-15・16)がある。碗(15)は口径9.4cm、器高5.7cm、底径4.7cmを測る。外面には呉須で文様が描かれていたようである。底部外面は釉薬がかかっていない。碗(16)口径11.3cm、残存器高3.8cmを測る。外面には呉須で網目文が描かれている。

瓦には軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。

土坑6 (SK 6 :LN12)

平面形体はほぼ円形で、直径1.5mを測る。深さは0.56mで、埋土は黄灰青色粘質土である。

遺物は磁器で、肥前磁器の碗の細片が1点出土している。

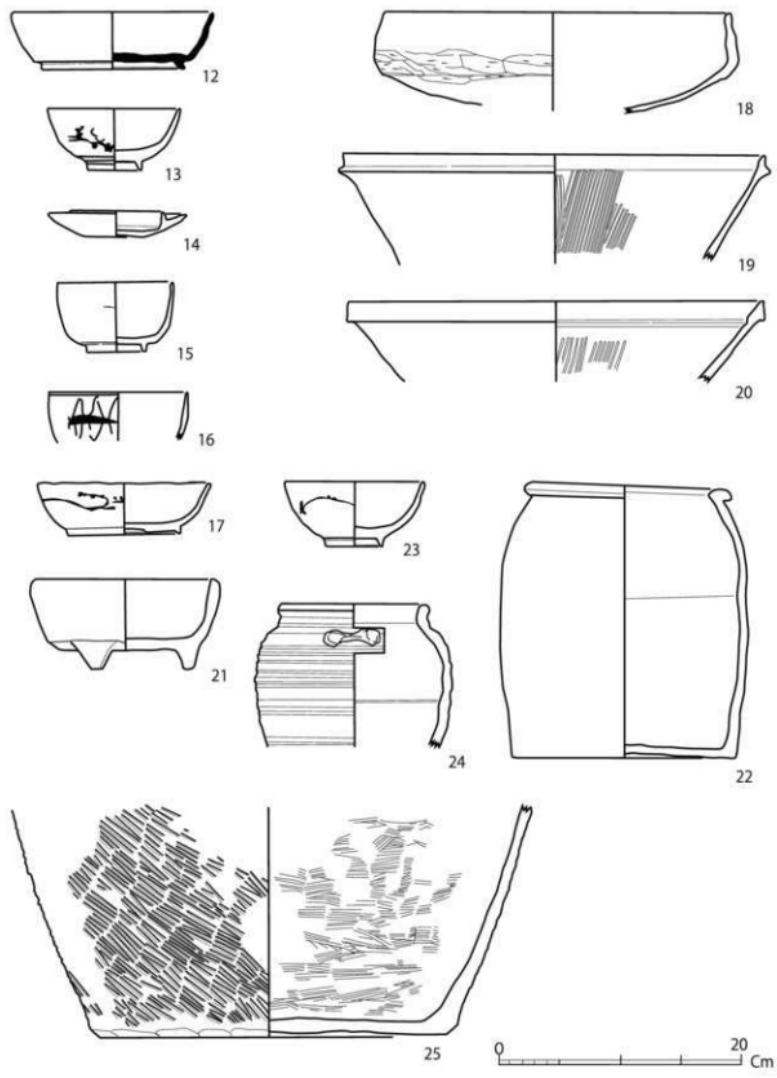
土坑7 (SK 7 :LN23)

調査区外に続き、東西0.85m、南北(0.47)m分を検出した。深さは0.2mで、埋土は濁灰色砂質土である。

遺物は、8世紀代の土師器と須恵器が出土している(図版4上)。

土師器には、皿、長胴の鍔釜がある。

須恵器には坏身(第10図-12・図版5-12)が出土している。坏身(12)は口径16.5cm、高台径11.3cm、高台高0.5cm、器高4.8cmを測る。口縁部は上外方に開き、端部で丸くおさまる。底部は平底で、やや内側に「ハ」の字状に開く高台が付き、端部は外接する。底部外面は未調整。そのほかは回転ナデ調整が施されている。



第10図 第3トレンチ出土遺物

土坑8 (SK 8 : LN27)

東西1.35m, 南北0.75m分を検出した。深さは0.17mで, 埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

土坑9 (SK 9 : LN37)

調査区外に続き, 東西0.6m, 南北(0.8)m分を検出した。深さは0.2mで, 埋土は濁灰色土である。

遺物は, 8世紀代の土師器と須恵器が出土している。ともに細片である。

ピット1 (SP 1 : LN17)

調査区外に続き, 平面形体はほぼ円形で, $0.35 \times (0.2)$ mの規模で検出した。深さは0.08mを測る。埋土は濁灰色土に黄色土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット2 (SP 2 : LN18)

平面形体はほぼ円形で, 0.48×0.47 mの規模で検出した。深さは0.27mを測る。埋土は濁灰色土に黄色土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット3 (SP 3 : LN19)

平面形体はほぼ円形で, 0.28×0.3 mの規模で検出した。深さは0.23mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

ピット4 (SP 4 : LN20)

平面形体は円形で, 直径0.18mの規模で検出した。深さは0.1mを測る。埋土は濁灰色土である。

遺物は出土していない。

ピット5 (SP 5 : LN22)

平面形体はほぼ円形で, $(0.27) \times 0.25$ mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット6 (SP 6 : LN24)

平面形体はほぼ円形で 0.35×0.4 mの規模で検出した。深さは0.1mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は須恵器, 土師質土器, 陶器, 磁器, 瓦が出土している。

須恵器は細片である。

土師質土器には甕(第10図-25)がある。底径28.4cm, 残存器高18.9cmを測る。底部はわずかに上げ底である。体部外面には2本/cmの平行タタキ調整, 内面は刷毛目調整で, 一部ナデ消している。内底面はナデ調整。底部外面は左から右方向へのヘラ削り調整が施されている。外底面は未調整である。

陶器には壺(第10図-24)がある。備前焼で, 口径11.9cm, 残存器高11.9cmを測る。肩部に耳が貼り付けられている。

磁器は肥前磁器の碗(第10図-23・図版5-23)がある。碗(23)は口径11.4cm, 高台径4.6cm, 高台高0.6cm, 器高5.4cmを測る。見込みは蛇の目釉剥ぎである。疊付の部分は釉薬がかけられていない。体部外面には呉須で梅枝文が描かれている。

ピット7 (SP 7 : LN23)

平面形体は隅丸三角形で, 0.17×0.18 mの規模で検出した。深さは0.04mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット8 (SP 8 : LN26)

調査区外に続き, 平面形体は半円形で, $(0.3) \times 0.25$ mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット9 (SP9 : LN33)

平面形体はほぼ円形で、 0.55×0.5 mの規模で検出した。深さは0.18mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は陶器と磁器が出土している。ともに細片である。

ピット10 (SP10 : LN35)

平面形体はほぼ円形で、 0.38×0.3 mの規模で検出した。深さは0.18mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット11 (SP11 : LN36)

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $0.31 \times (0.2)$ mの規模で検出した。深さは0.11mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット12 (SP12 : LN34)

平面形体は不整形で、 $(0.23) \times 0.3$ mの規模で検出した。深さは0.02mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット13 (SP13 : LN31)

平面形体はほぼ円形で、 0.3×0.4 mの規模で検出した。深さは0.06mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット14 (SP14 : LN38)

平面形体は円形で、直径0.18mの規模で検出した。深さは0.17mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット15 (SP15 : LN32)

調査区外に続き、平面形体は三角形で、 $(0.31) \times (0.4)$ mの規模で検出した。深さは0.11mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット16 (SP16 : LN28)

ピット17とピット18に切られているが、平面形体はおそらくほぼ円形で、 $(0.2) \times 0.25$ mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット17 (SP17 : LN29)

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $0.25 \times (0.16)$ mの規模で検出した。深さは0.11mを測る。ピット16を切り、ピット18に切られている。埋土は濁灰褐色土である。

遺物は出土していない。

ピット18 (SP18 : LN30)

平面形体はほぼ円形で、 0.25×0.23 mの規模で検出した。深さは0.22mを測る。ピット16とピット17を切っている。埋土は濁灰色土である。

遺物は瓦が出土している。

第4トレンチ (第11図～第13図、図版4下・図版5)

堆積層は3層で、遺構は第3層上面と地山面で検出した。

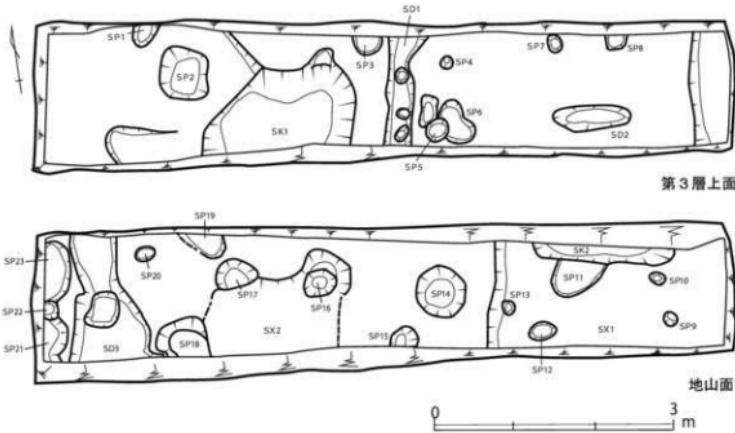
第1層からは、土師質土器、陶器、磁器が出土している。

土師質土器にはほう烙がある。

陶器と磁器はともに細片である。

第2層からは弥生土器、土師質土器、軟質施釉陶器、陶器、磁器、瓦が出土している。

弥生土器には甕片がある。



第11図 第4トレンチ平面図

土師質土器には羽釜、甕、ほう焰などがある。

軟質施釉陶器には、灯明皿が1点ある。

陶器にはすり鉢がある。

磁器には皿、碗がある。

瓦には軒丸瓦、丸瓦がある。

第3層からは、土師器、須恵器、土師質土器、軟質施釉陶器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦が出土している。

土師器には甕片がある。

須恵器は口縁部が立ち上がる坏身が1点、高坏の脚部が1点出土している。所属時期は7世紀後半に比定できる。

土師質土器には鍋（第12図-28）がある。口径29.7cm、残存器高4.5cmを測る。口縁部は大きく外反して開き、端部はつまみあげられて、断面三角形を呈する。口縁部内外面は横ナデ調整。口頸部外面はヘラ磨き調整が施されている。体部内面は5本/cmの刷毛目調整、外面はナデ調整が施されている。口頸部外面には煤が付着している。

軟質施釉陶器には灯明皿が1点あり、口縁部に煤が付着している。

瓦質土器は細片である。

陶器には碗とすり鉢が1点ずつある。

磁器には碗がある。

瓦には軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は巴文と無文のものがある。

第4トレンチ第3層上面で検出した遺構は、溝2条、すなわち、溝1 (SD1 : LN12)、溝2 (SD2 : LN18)、土坑1基、すなわち土坑1 (SK1 : LN11)、ピット8基、すなわち、ピット1 (SP1 : LN20)、ピット2 (SP2 : LN19)、ピット3 (SP3 : LN13)、ピット4 (SP4 : LN21)、ピット5 (SP5 : LN14)、ピット6 (SP6 : LN15)、ピット7 (SP7 : LN16)、ピット8 (SP8 : LN17)である。

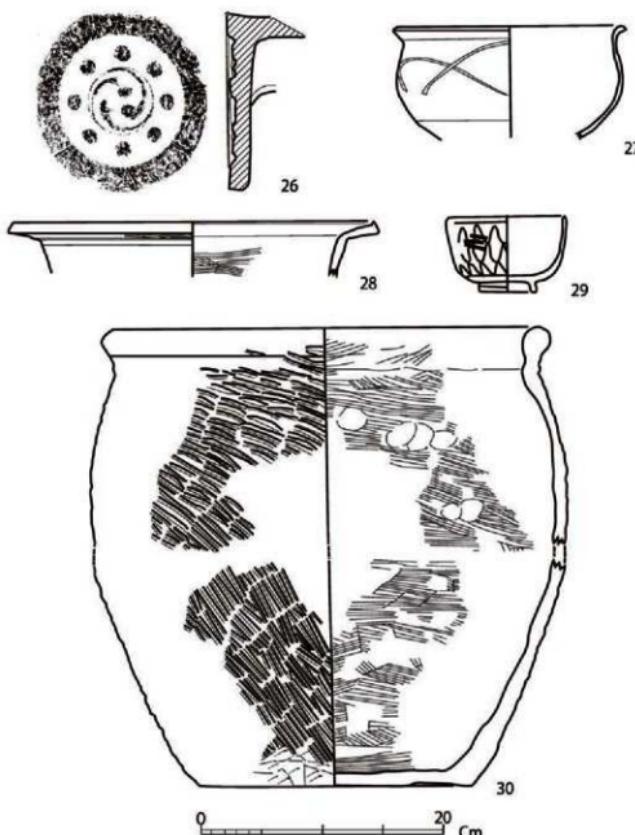
また、第4トレンチ地山面で検出した遺構は、溝1条、すなわち溝3 (SD3 : LN24)、土坑1

基，すなわち土坑1 (SK2 : LN31)，落ち込み2基，すなわち落ち込み1 (SX1 : LN35)，落ち込み2 (SX2 : LN28)，ピット15基，すなわちピット9 (SP9 : LN37)，ピット10 (SP10 : LN36)，ピット11 (SP11 : LN34)，ピット12 (SP12 : LN33)，ピット13 (SP13 : LN32)，ピット14 (SP14 : LN29)，ピット15 (SP15 : LN30)，ピット16 (SP16 : LN28-1)，ピット17 (SP17 : LN21)，ピット18 (SP18 : LN25)，ピット19 (SP19 : LN26)，ピット20 (SP20 : LN38)，ピット21 (SP21 : LN27)，ピット22 (SP22 : LN24)，ピット23 (SP23 : LN23) である。

第3層上面遺構

溝1 (SD1 : LN12)

調査区外に続き，長さ (1.35) mを検出した。南北方向の溝で，幅0.31m，深さは0.1mであった。埋土は濁灰黄褐色で炭が混入していた。



第12図 第4トレンチ出土遺物（その1）

遺物は土師質土器と陶器が出土しているが細片である。

溝2 (SD 2 : LN18)

調査区外に続き、長さ（0.96）mを検出した。東西方向の溝で、幅0.42m、深さは0.1mであった。埋土は濁黄褐色土である。

遺物は土師質土器と磁器が出土しているが細片である。

土坑1 (SK 1 : LN11)

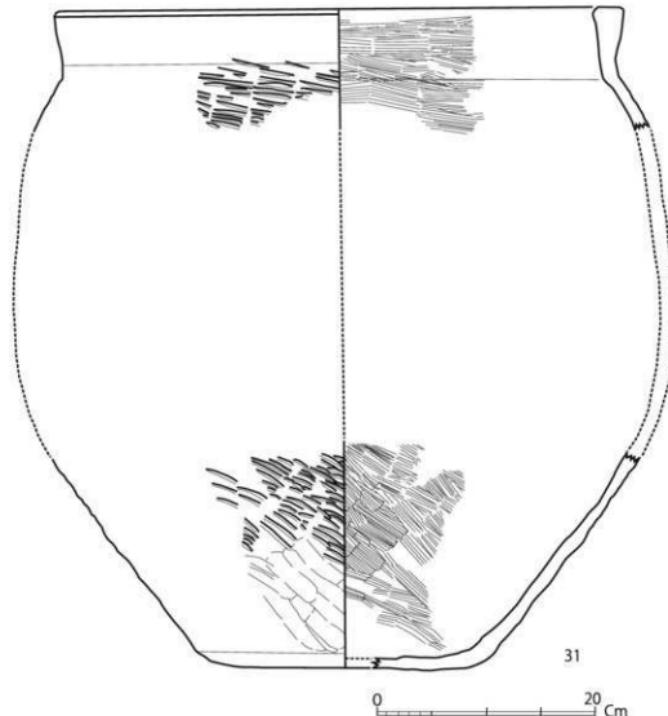
東西1.95m、南北（1.4）m分を検出した。深さは0.45mで、埋土は濁灰黄色混礫砂質土である。

遺物は軒丸瓦（第12図-26）が出土している。瓦当面に右巻きの三巴文と、外区に珠文が8個付されている。焼成は良好で表面は銀化している。

ピット1 (SP 1 : LN20)

調査区外に続き、平面形体はほぼ円形で、（0.3）×0.25mの規模で検出した。深さは0.49mを測る。埋土は暗灰色土に黄色土がブロック状に混じる。

遺物は瓦が出土している。巴文の軒丸瓦1点と丸瓦1点である。



第13図 第4トレーニチ出土遺物（その2）

ピット2 (SP 2 : LN19)

平面形体はほぼ四角形で、 0.6×0.65 mの規模で検出した。深さは0.37mを測る。埋土は濁灰黄色混礫砂質土で、炭片が混じる。

遺物は陶器の土鍋（第12図-27）が1点出土している。口径18.8cm、残存器高9.2cmを測る。体部外面には「X」字状の文様が描かれている。体部下半は露胎している。

ピット3 (SP 3 : LN13)

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $0.35 \times (0.2)$ mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は濁灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

ピット4 (SP 4 : LN21)

平面形体は楕円形で、 0.14×0.17 mの規模で検出した。深さは0.1mを測る。埋土は濁灰黄褐色土で炭片が混じる。

遺物は須恵器、土師質土器、陶器、磁器が出土している。

須恵器、陶器、磁器は細片である。

土師質土器は甕（第13図-31）と鍋が出土している。甕は口径56.8cm、底径24.0cm、復原高59.7cmを測る。体部中央部は欠失している。口縁部上面は平坦面をもち、底部はわずかに膨らみをもつ。体部外面には3本/cmの浅い平行タタキ調整、内面は刷毛目調整。内外底面はナデ調整である。

ピット5 (SP 5 : LN14)

平面形体は円形で、直径0.3mの規模で検出した。深さは0.2mを測る。埋土は暗灰色土に黄色土がブロック状に混入し、炭片が混じる。ピット6を切っている。

遺物は土師質土器、磁器、瓦、釘が出土している。

ピット6 (SP 6 : LN15)

平面形体は不整形で、 0.4×0.57 mの規模で検出した。深さは0.08mを測る。埋土は濁黄褐色土である。ピット5に切られている。

遺物は土師質土器が出土している。

ピット7 (SP 7 : LN16)

平面形体は円形で、直径0.25mの規模で検出した。深さは0.05mを測る。埋土は濁黄褐色土に炭片と焼土が混じる。

遺物は出土していない。

ピット8 (SP 8 : LN17)

調査区外に続き、平面形体は四角形で、 $0.24 \times (0.18)$ mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は暗灰色土に濁黄色土が混入する。

遺物は出土していない。

地山面遺構

溝3 (SD 3 : LN24)

調査区外に続き、長さ（1.56）mを検出した。南北方向の溝で、幅0.27m、深さは0.21mであった。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。また、炭も混入する。

土坑2 (SK 2 : LN31)

調査区外に続き、平面形体は長方形で、 $(0.2) \times 1.79$ mを検出した。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。落ち込み1の底面で検出した。

遺物は須恵器、土師質土器、陶器、磁器、瓦が出土している。

須恵器と土師質土器は細片である。

陶器にはすり鉢がある。

磁器には肥前磁器の碗（第12図-29・図版5-29）がある。口径9.7cm、高台径4.5cm、高台高0.9cm、器高6.35cmを測る。疊付部分に砂粒が溶着している。体部外面は一重網目文に魚が描かれている。

瓦は平瓦がある。

落ち込み1 (SX1 : LN35)

調査区外に続き、平面形体は長方形で、(2.58) × (1.22) mを検出した。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。底面で、土坑2、ピット9～ピット13を検出している。遺物は出土していない。

落ち込み2 (SX2 : LN28)

調査区外に続き、平面形体は不整形で、(1.72) × (0.91) mを検出した。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。落ち込み2の底面でピット16を検出した。ピット17とピット18を切っている。

遺物は出土していない。

ピット9 (SP9 : LN37)

落ち込み1の底面で検出した。平面形体は円形で、直径0.18mの規模で検出した。深さは0.11mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット10 (SP10 : LN36)

落ち込み1の底面で検出した。平面形体は円形で、直径0.18mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット11 (SP11 : LN34)

落ち込み1の底面で検出した。平面形体は、土坑2に切られているため、ほぼ半円形で(0.61) × 0.55mの規模で検出した。深さは0.05mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット12 (SP12 : LN33)

落ち込み1の底面で検出した。平面形体は梢円形で、0.34 × 0.23mの規模で検出した。深さは0.04mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット13 (SP13 : LN32)

落ち込み1の底面で検出した。平面形体はほぼ円形で、0.15 × 0.18mの規模で検出した。深さは0.15mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット14 (SP14 : LN29)

平面形体は円形で、直径0.65mの規模で検出した。深さは0.19mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。遺物は出土していない。

ピット15 (SP15 : LN30)

調査区外に続き、平面形体はおそらく円形で、直径0.35mの規模で検出した。深さは0.04mを測る。埋土は濁灰色土に暗黄色弱粘質土がブロック状に混入する。遺物は出土していない。

ピット16 (SP16 : LN28-1)

落ち込み2の底面で検出した。平面形体はほぼ円形で、直径0.5mの規模で検出した。深さは0.24mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット17 (SP17 : LN21)

落ち込み2に切られているため、平面形体は半円形で、0.52 × (0.35) mの規模で検出した。深さは0.21mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット18 (SP18 : LN25)

調査区外に続くと、落ち込み2によって切られているため、平面形体は隅丸方形で、 $0.62 \times (0.48)$ mの規模で検出した。深さは0.28mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は須恵器、土師質土器、瓦が出土している。

ピット19 (SP19 : LN26)

調査区外に続き、平面形体は半円形で、 $(0.5) \times 0.3$ mの規模で検出した。深さは0.42mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は陶器、磁器、瓦が出土している。

ピット20 (SP20 : LN38)

平面形体は楕円形で、 0.22×0.19 mの規模で検出した。深さは0.37mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット21 (SP21 : LN27)

調査区外に続くと、ピット22に切られているため、平面形体は半円形で、 $(0.3) \times (0.55)$ mの規模で検出した。深さは0.07mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。

遺物は出土していない。

ピット22 (SP22 : LN24)

調査区外に続き、平面形体はほぼ半円形で、 $(0.15) \times 0.25$ mの規模で検出した。深さは0.04mを測る。埋土は濁灰色土に10~20cmの礫が混入する。ピット21とピット23を切っている。

遺物は出土していない。

ピット23 (SP23 : LN23)

調査区外に続くが、平面形体はおそらく楕円形で、 $(0.35) \times 0.7$ mの規模で検出した。深さは0.1mを測る。埋土は濁灰色土に黄褐色弱粘質土がブロック状に混入する。ピット22に切られている。

遺物は土師質土器の細片が出土している。

(田川、栗田)

第4節 小結

富田林寺内町遺跡は、永禄元（1558）年頃、一向宗興正寺別院を中心に宗教自治都市として成立した富田林寺内町に広がる遺跡である。近世の富田林寺内町は、在郷町として南河内地方の経済の中心として発達し、現在でも、江戸・明治・大正・昭和初期の町家が現存している。また、町の中は東西7本、南北6本の道路によって区画され、その町割りは建設当初から現在にまで、ほぼその姿をとどめ、町の周囲には土居を巡らし、出入り口には門を設置して、町の内部には下水道を完備するといった都市計画も実施されていた。

今回はそのような寺内町の北東部での調査であったが、トレント調査という制約のもとで、溝、土坑、井戸、ピットと多くの遺構の検出があったものの、残念ながら、遺構の配列からみての往時の様子を復元することはできなかった。しかしながら、江戸時代後半の遺物が多く出土したことによって、当時の寺内町の人々の生活を彷彿とさせることになったことは大きな成果と言えよう。

さらに加えて、弥生土器、7世紀代や8世紀代の土師器、須恵器の出土があり、寺内町成立のはるか以前から、この地で人々の営みがなされていたことが確実になったことは、今後の調査で、寺内町成立以前の解明という重要課題が加わることになったと言えよう。

(中辻、田川)

図 版

図版 1



第1 トレンチ全景（南東から）



第2 トレンチ全景（西から）



第2 トレンチ井戸 1近景

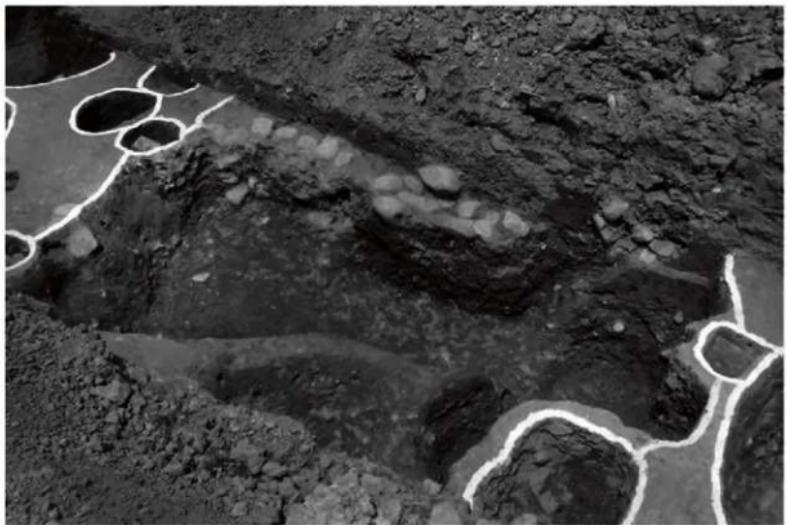


第2 トレンチ土坑 1要出土状況（南から）

図版 3



第3トレンチ全景（左：西から、右：東から）



第3トレンチ土坑5近景（南東から）



第3 トレンチ土坑7遺物出土状況（東から）



第4 トレンチ第3層上面遺構全景（東から）



第4 トレンチ地山面遺構全景（東から）



2



4



5



6



12



13



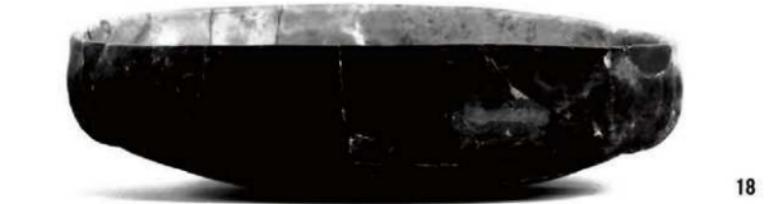
23



7



29



18

報告書抄録

ふりがな	とndaばやしじないまちいせき
書名	富田林寺内町遺跡
副書名	倉庫等建設に伴う発掘調査概要報告 (GC90)
卷次	
シリーズ名	富田林市文化財調査報告
シリーズ番号	20
編著者名	中辻亘 栗田薰 田川友美 青木昭和(編)
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL0721-25-1000(代)
発行年月日	2022(令和4)年9月30日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
とんだばやしじないまちいせき	とんだばやしちょう	27214	29	34°30'5"	135°36'13"	19900416～19900507	45 m ² 記録保存調査(倉庫等建設)
富田林寺内町遺跡	富田林町						

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富田林寺内町遺跡	集落跡	古代～近世	溝 土坑 ピット	土師質土器 須恵器 陶器 磁器 瓦	近世後半の遺構・遺物のほか、7～8世紀代の須恵器などが出土したことから、遺跡が寺内町成立前に遡ることが判明。

富田林寺内町遺跡

- 倉庫等建設に伴う発掘調査概要報告 (GC90) -

発行年月日 2022年9月30日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 明朗社